同人誌「はるにれ」2022・7月号

コロナ四季・その後

棗　隆

1　まあだだよ（春～夏）

あかさたな・あかさか・あさはか・あからさま・あんしん・あんぜん・あまり・あ・かるい
繰りかへすひとりごちなる「あ」の言葉、むなしく響く。彼方見つむる
場当たり的すつたもんだの改変の大・運動会　いまし開かる
中止なり！小中高の運動会・修学旅行の思ひ出……ああ、晴れ晴れと褻の違ひやいかに？褻のコロナ・晴れの運動会に圧されて
為されたり。玉虫色の決着のかずかず……闇を切り裂く花火
華やかさ纏ひてあゆむ選手団。晴れがましきに違和感ますます
国民に勇気あたふる運動会　応援を為む。こゑ忍ばせて
感染対策バブルの晴れ間・権力の雨降りそそぐ。何ごともなく……
たましひを込めたる言の葉、聴けぬ夏。晴れならいいね！日本ガンバレ
もういいかい？まあだだよ！てふこゑのして誰そ彼れコロナ感染者・殖ゆ
危機管理隙間だらけのまつりごと弱きをくじく。強きを助け
笑ふほかなしケセラセラ？感染者あまた待機になすすべもなく……
ゼロコロナ・アフターコロナ・ウィズコロナ意地はりやまず転ぶが負けえ？
わらべうた・こんこんちきちき・こんちきちん・疫病の夏のすぎ逝かむとす

（2021，10　うた新聞・改変）

2　もういいよ（夏～秋）

打ちあがる火花　いくたびWAを成せば踊らな。ララ夢を叶へむ
演舞する白き男の目の細さ　未来を見つむ。カッと見開く
鎮魂のねがひの深さ。コロナ禍の∧過現未∨おもふ。演舞なる果て
あいうえお順に行進　とてちてた。あめゆじゆとてちてけんじやの行進
宙に舞ふドローンあまた編隊をなしてイマジン。地球の未来
あまりある・あまねく・あまたのあいさつのあはれ。あめふるなかのあいまい
ユーモラス・ピクトグラムのパフォーマー　言葉要らずも。優しさに満つ
願ひもて灯す聖なる火のあかり　未来照らすや。勢ひを増す
こんちきちん・誘ひの鉦のお囃子のこんこんちきちん・疫病封ずる
暑き夏、雨多き夏、オリ・パラの夏ゆき過ぎて感染者・減る
感染者激減！国内安堵感！疫病退散！効果覿面！
もういいかい？もういいよ！てふこゑのして彼は誰けふは遠出為さむか

（2022，1　はるにれ・改変）

3　花咲かす爺（秋～冬）

もういいかい？まあだだよ、否もういいよ！……童謡流る。辻占のごと
幼子のうたふ童謡「こんちきちん」秋さればはや、鎮まらむとす
幼子のうたふ「迷子の子猫ちやん」おうちやいづこ？コロナ禍のすゑ
なむあみだ・なむめうほふれん・なむさんや？疫病しづもる。呪言の果てに
コロナ禍に「激おこぷんぷん丸」殖えてギャル語復活せよ。秋の暮れ
「まじおこ」に「烏滸」を加へむ。まつりびと　舌先三寸の公約……為せば
キャッシュレス決済・推奨デジタル化・抑止なし得ず。システムダウン
コロナ禍にリモートワーク・オンライン拡がる。肩身の狭さ……ますます
スマホ画像ふかく蔓延るこの日ごろ。「デジカメ」過去の遺産なるやも
「デジカメ」と「出歯亀」一字の違ひにて覗く相手の良し悪しに拠る
われ祖父・花咲か爺・5G・「スマホ」手にもて枯木に花を
渇望す。枯木に花を咲かす爺。コロナ弊れのいまの世にこそ
まつりごと・待つ間・幕切れ・見まく欲る・蒔く種・撒く灰・
間に合ふままに
咲かせやせう！ひと肌脱げば金四郎。さくら吹雪の世直しならむ

（2022，2　滄・改変）

4　春のことぶれ（冬～春）

「狼が来たぞ！」ふたたび童謡の流るる夕べ春のことぶれ
繰り返すそらごとあまた。流れくる言葉、真偽の対象と為す
感染者増加傾向・超加速・蔓延防止等重点措置・発令！
感染源・多種多様にて狼の匂ひただよふ春のあけぼの
春さりてむつきさらぎ感染者ふえてしまらく黄なる蝋梅
菜の花の名前はなあに黄に染まる野辺の三昧けぶりたちたつ
国境をてふてふ越ゆる昼下がり花から花へ気の向くままに
花の蜜いづれの国も甘くしてはなののののはな異ならなくに
花の色うつろへばまた季のめぐり春らんまんの国ゆはろかに
国ざかひ県ざかひ否せやさかい境あらそひ虚しきものを
桜咲く美しき日本にコロナ減りセンサウ忍び寄る春の暮れ
さつりくのりくつさまざままざまざとがめんにうつるきちくのしよぎやう
みざるきかざるしらざるのかほうらじみるぷうちんげすのきはみなるかほ
たまさかるをとこわがよのはるめぐりげすのきはみになりはててゐる
シベリアに抑留されしわが叔父の死を知る戦闘、激化する朝

（2022，7　はるにれ・新作）

同人誌「滄」2022・5月号

おろか

棗　隆

ある日ある時あるべきならぬ侵攻のあるがままにて始まるおろか
憎しみに安らぎなくば人間のおろかさ醜さ嗚呼くだらなさ
好むとも好まざるともセンサウは他人事ならず。この日の本も
メイレイに従はざれば粛清の対象なるやも……独裁国家
粛正か?いな粛清か?独裁の恐怖に耐ふる国びと……嗚呼、はれ
砂けぶり画面に映るニュース見て家を出で来ぬ。暗澹として
バクダンが降ってくるやも。ボクの町キミの町にもいつか……けふやも
子や孫の世代に遺す憎しみの嵩ふえゆけば安穏ならず
「洗脳」と呼ぶ大魔王。ラテン語の「プロパガンダ」に見えかくれする
「プロパガンダ」＝悪魔の言葉。「宣伝」と「喧伝」似てゐて非なるものやも
「アジテーション」＝扇動といふ誘惑のひとつやふたつセンサウに栄ゆ
うつせぇわ叫ぶをんなの澄まし顔「正しさ」「愚かさ」見せつけやまぬ
殴つたりするのは邪道。突きつける言葉の銃を撃つのぞマナー
攻むるにも愛を!いのちのやり取りに嘘いつはりの満つれば昏し

同人誌「滄」2022・8月号

最中ふるふる

棗　隆

戦争をせぬと決めたる記念日の最中・彼の国・戦禍の最中
Uターンラッシュ・クラッシュ・重軽傷・戦禍ならざるコロナ禍の国
モナカ・モニカ・ハモニカ・プップ・ラッパ・カッタ・ヘイタイスズメ・ヤッタ・カッタ
無誘導爆弾あまた・無差別に町を襲へば〇〇〇〇〇〇の増ゆ
噛み合はぬ主張さておき爆撃に耐ゆるほかなし無辜の市民は
空爆の音鳴りやまぬ地下室の闇にこだます民らの嘆き
空ゆ降る爆弾ちらりほらりほら内はほらほら外はすぶすぶ
闇の主ごろすけほうほう鳴く夜半にでえだらぼっちの足跡ひとつ
ああ天皇陛下バンザイ!この国をかつて統べたる言葉・ロシアに!
核実験核抑止力弾道弾・斯く斯く然然・発射ーマンセー
まぼろしに視るきのこ雲・被爆国・矜持わすれぬ憲法を保つ
ヤラレタラヤリカヘスとふ考への危ふさ虚しさああクダラナサ!
対岸の火事ならざると知りてより「先制攻撃」為したる記憶
忘れざれー他山の石にあらざれど無辜のいのちのたふとさを知れ!

ゑまひのにほひ

棗　隆（はるにれ・滄）

角川「短歌」2021年8月号

はれわたるれいわのあさのしたしさにねむるみどりごつつじのかをり

ざぶとんにえいじだいのじふかねむりときをりぴくりかひなうごかす

ほそきゆびにぎるみぎのてずらしつつみどりごかろくみるくのみほす

たまきはるいのちのあかしくるくるりくろめまはしてふいにほほゑむ

くもはやくごごいちばんのここちよさねむりいざなふにはにさくふぢ

ふきながしみどりごねむるまひるまをたれてをりふしはためかむとす

むらさきのはなぶさゆれてみどりごのあさきねむりはほのくれなゐに

あはきゆめゑまひのにほひうきいでてまなざしあはれみどりごのおも

あくがるるとほきみらいのはてしなさねむれみどりごなべてわすれて

かげりなきみちゆくちさきうばぐるまあぢさゐいろのふるひるさがり

よひすぎてうまいしなさぬみどりごのこゑしんしんとやみにひびかふ

さよふけてなくとりのこゑみどりごのねむりさますなたれよぶこどり

歌集

さらば、白き鳥よ

棗 隆
Takashi Natsume

なゐ震る国（壱）

山は崩れて河を埋み、海は傾きて陸地をひたせり。……恐れのなかに
恐るべかりけるは、ただ地震なりけりとこそ覚え侍りしか。（方丈記）

なゐの国　俄かに崩る。触れもなく、揺り揺れ揺られ、みな立ち尽くす

土瀝青　割れて噴き出す水の束。なゐ揺る国の弱さ、露呈す

本棚の「折口全集」傾れ来て、跳ね飛ばしたり。寺山修司

海やまのあひだに　生くる人々の、逃げまどふ見ゆ。画面の奥に

襲ひ来る波より　逃ぐる人々の、怒号と悲鳴　テレビにて知る

三ケ月前　わが訪ねたる陸の奥、漁船・自宅・自動車　波濤に呑まるる

人間の叡智　及ばぬ天地の、憤怒か。波の破壊力　激烈し

無慈悲なり。津波の仕業、東日本沿岸襲ふ。根こそぎ奪ふ

三陸地方の伝承とふ「津波てんでんこ」――各自・全力ばらばら逃げよ

さゐさゐと寄る波にさへ、押す力　引く力あり。まして海立は

なゐ震るは国の宿命と、みな知るも　人智を超ゆるものの　すべなさ

配水管　震災直後に破れたり。校舎裏　高く、水噴き上がる

鉄道は全く動かず。帰る手段なき生徒　十三名、学校に宿泊す

「首都東京」「鉄道運休」「震度五強」「帰宅難民」「拡大数多」

「東日本大震災」「死者日日増加」「義援金詐欺」「多発暗澹」

なゐ震る国（弐）

福二といふ人は海岸の田の浜へ婿に行きたるが、先年の大海嘯に遭ひて妻と子とを失ひ、生き残りたる二人の子と共に元の屋敷の地に小屋を掛けて一年ばかりありき。（遠野物語）

道路裂けて建物崩れ落つ。触れもなく、大地震起きぬ。人智及ばず

人間の叡智　遙かに大津波、集落を引き摺る。言葉……うしなふ

逃げまどふ人ら　画面にあふれゐて、あれよあれよと怒濤　迫り来る

余りにも慈悲なき地球の、為業なるや。建物漁船自動車なべて、呑み込む

海やまのあひだを海嘯　遡上して、たまゆら　命を剥奪ふ。激烈しさ

地震頻発り、揺りかへす日々。「復興」の二文字　軽し。新聞見出し

蜚語あまた、世を駆け巡る。情報化社会の果てSSSS連鎖的手紙

地震・海立・放射線漏・三重苦・県民・無惨・原発・飛散

原子力・安全神話・即崩壊・隠蔽体質・露呈・風評

農民ら悔し涙す。農作物　風評受けて今朝も、潰せる

ひと昔前に　逝きたる仁三郎。脱原発を　生命懸け、説く

被災地のさくらの便り、待ち侘ぶる。計画停電中の東京に

常春の島

黒潮の影響ありや。〈常春（とこはる）の島〉と呼ばるる　伊豆の大島

水平線に沈む太陽、島の南部。見る場所により大きさ、違ふ

海へだて伊豆の山なみ　冴ゆる秋。家族と離（さか）り住むは淋（さみ）しき

島民（しまびと）が〈御神火（ごじんくわ）〉と呼ぶ三原山。神なる山は島を　うるほす

三原山生まれ、ゴジラは破壊神。〈御神火〉吹いて、地球（テラ）を救ふや

三原山　火口原、けさは霧ふかし。溶岩流も道も　見分かず

月面のごとき寂（さび）しさ。裏砂漠。岩滓（スコリア）と呼ぶ軽石（マグマ）　広がる

若者ら汗だくとなり、ひたに打つ。〈御神火太鼓〉耳に張りつく

年増なる〈大島娘（あんこ）〉の踊り、見てゐれば、ゆつたりと過ぐ。島の時間は

〈あんこ〉とは年上女性、姉のこと。若き大島娘よ〈スーパーあん娘〉

大島にカッパゐたるといふ伝説。ほほゑまし。川のなき島なるに

海亀の産卵にくる　砂の浜。三原おろしの吹く　夏の夜

人まばらなる夕まぐれ。波浮の港、時をり　鰡（ぼら）が跳ねて音たつ

電線を器用に　渡るリス一匹。威嚇するがにひと声、鳴けり

椿咲き、島を訪ぬる人ふえて　港にぎはふ。春のことぶれ

大島詠物集（海岸篇）

乳(ち)が崎

陸軍少佐
福井某氏の忠魂碑
この岬山(さきやま)に
自決す。二十七歳

土田耕平歌碑

影曳きて
土田耕平　歩みしか。
かの日のとほき
潮鳴りを聴く

元町港

ターミナル前の
食堂「かあちゃん」の
べつかふ寿司の
味　辛かりき

砂(さ)の浜

波音の絶えざる浜辺
散歩する
若き女と
犬と、風船

波浮港

岸壁に潮満ち、
溢るる　大潮の
ゆふべ　ひたひた
迫りくるもの

オタア・ジュリア

海に向き、白き
十字架　立つ
丘に、殉教者オタイ
流されて来ぬ

オタイの浦

遠流(をんる)の地
ここ大島に　連れ来られ、
朝鮮婦人
オタイ哭く浜

西海岸

海へだて
伊豆半島と　向かひ合ふ
椰子の並木の
続く　西海岸(サンセットパームライン)

病む父

肺を病み日ごと衰へゆく父のふくらはぎ蒼き静脈が浮く

加速せよ。いちやう並木の国道を苦しむ父を乗せ、ひた走る

咳こみて歩けぬ父の肩ささへ救急外来の扉おし入る

ひと目見て「入院させよ」と言ひ放つ当直の医師、診察の前

チアノーゼ酸素不足の証拠ぞと若き医師言ふ危ふさを説く

真白なる闇ひろがれりレントゲン写真に父の肺見当たらず

国による難病指定の病名を告げられて父、穏やかならず

父を乗せ初めて車椅子押したり前輪が曲がり、うまく進まず

車椅子の旅「一階の左奥……」「二階の右隅……」と検査室めぐる

父の衰弱からうじて止む酸素吸入最大量にて治療続けば

点滴に縛られ酸素マスク付け退屈至極動けぬ父は

結婚後四十五年目の秋過ぎて母うつろ病む父を看護す

病棟に靴の音つか、つかつか、つか。夜勤看護師止まり、立ち去る

ぶかぶかの寝巻きより出づ病み痩せて棒のやうなる父の手と脚

歩くことままならぬゆゑ日ごと夜ごとわがままを言ふ病み重き父

神の領域

神の領域なれば予測は不可能と父の死はたれも触れ得ざる闇

病状を説明に来る若き医師「最善尽くす」と義務的に言ふ

「手術せねば助からざる」と言ひてのち「麻酔は出来ぬが」と医師は付け足す

間質性肺炎・腸閉塞また大動脈瘤ちちのみの父の現実きびし

呼吸困難・酸素吸入する父は命つながむためにこゑあぐ

唸りつつ息する父のこゑひびく〈大晦日〉廊下に人影はなし

苦しくて胸かきむしるといふ言葉ほんたうなり。父は咳き、かきむしる

父の手も脚も骨皮筋衛門　点滴のみに二ヶ月を生く

ごま塩の鬚髭（ひげ）もまばらに伸び育ち父の眉間の皺深みたる

「いまここに天皇陛下がお見舞ひに来た」意識混濁の父がつぶやく

真向かひの老人は今朝運ばれて意識戻らぬまま死すと聞く

檀那寺もたぬ我が家は〈いざ〉といふ時の始末に思ひ至らず

不謹慎なるや親族会議もて相談す父の死後〈いざ〉の果て

死にざまはいかにあらんか。はるかなる戦中戦後を耐へ来し父の

神の領（し）る生き死になれば昏々と眠れる父を見守（まも）るほかなし

夜の霊園

霊園にさくら咲き満ち咲き乱れ眠れる死者を起こす夜もある

戦死者を祀る御堂にさす月の影きよらなり夜半(よは)の霊園

霊園の闇に潜めるたんぽぽの絮(わた)の飛びゆくすゑぞ知りたき

月冴えてむらさき映ゆる木蓮の花みな天を仰ぐしづけさ

山峡(やまかひ)に墓石ひろがる霊園の闇にうつすら卒塔婆(そとば)浮き立つ

カタカタと卒塔婆揺らして伝ふるや死者なる無念・生くる妄念

死者たちの無念を聴かな言葉ひとつ闇に投げかけ返事ひた待つ

はぐれたる鳥のごとくに廻(めぐ)りをり桜しき降る真夜(まよ)の墓はら

何鳥か真夜中に来てふいに鳴く〈酔生夢死〉と聴こえ驚く

霊園の闇を切り裂く鳥のこゑ鋭(と)く鳴くこゑの主(ぬし)は何者

手向けゐる花は枯れ初めうなだれて斬首のかたち月に曝さる

闇に向き〈色即是空〉と唱へたり友の色恋沙汰を思(も)ひつつ

人間の欲なるひとつ色情のはたてにありや〈愛〉と呼ぶもの

ふたたびを逢へざるままに帰らむか墓処(はかど)に眠る友よさらば

昂ぶりて眠れぬ夜はひとしきり〈般若心経〉唸りてみたり

追伸

丸文字の〈拝啓〉むかしあこがれしきみのままなる手紙届きぬ

ふたむかし超えて読みゐるきみの文字〈あの頃〉といふ甘き追憶

繰り返し読む丸文字の向かう側「笑顔同封」きみは忘れず

〈あの頃〉といふ名の酒に酔ひゐたり「交響楽（シンフォニー）」さうさ昔は昔

アルバムを開けばふいに蘇るなかなか昏れぬ夏「蟬時雨」

スイッチ・オン〈深夜放送〉終はるまで聴きつつきみの真夜中想ふ

酒好きの国語教師の人生論うさんくさきをわれは好める

古典文法補習授業は活用形〈恋〉しく・しく・し・しき・しけれ・噫

身を捨つるおもひ届かずきみの横に見てゐる映画〈不条理〉描く

にんまりと笑ふ口ひげバトラーの愛は命を賭けて勇まし

草はらに寝転び〈交換日記〉書くタンポポ、ポポポ押し花にして

十七の夏にナクシタ！青インク滴らせ詩を刻める日記

〈あの頃〉に忘れもの！取りにゆかざれば行方不明となる恋ごころ

「健康に留意しませうお互ひにがんばりませうではまた〈敬具〉」

〈追伸〉と書き出す手紙破り棄てまた逢へたらと思ふゆふぐれ

同人誌「はるにれ」2022・10月号

うたがたり

棗　　隆

くさむらに鳴く虫の音にほだされて踊りだしたる魂ふたつ

游びだす魂ふたつ秋の宵ゆらゆら闇をただよひやまず

宵闇に浮びて消ゆるおもかげのうたがたりああさびしからんに

地に足をつけしかと聴くうたがたり汝(な)がおもかげは身じろぎもせず

哭きさけび耳朶に響かふ七五調しらぶるさまを懐かしみ立つ

うるはしき秋の一日(いちにち)ゆくりなく死者たちつどひゆふべ語らふ

死者たちの怒りうづまく夕まぐれかんかんがくがく愕然なりき

死者たちの記憶うつろふ夕まぐれ此れの世なべて虚仮(こけ)なるを知る

まんまろき月影さやか中秋に死者たちうたふわが子守歌

そろそろと歩むくらがり中秋の月よりほかに照らすものなし

美しき青春などと呼ぶなかれ彼の日のわれら檻褸(らんる)まとひて

秋の日のつるべ落としに見うしなふうしろ姿の魂ふたつ